# 再び George Eliot の田園小説について

## ——*The Mill on the Floss* 論——

藤　井　元　子

*The Mill on the Floss* (1860) は George Eliot の初期の田園小説のうち、もっとも自叙伝的なものである。処女作 *Scenes of Clerical Life* (1857) は、作者の幼年時代の見聞を素材にしたものであり、*Adam Bede* (1859) はその家庭および近親、周囲のひとびとをモデルにして描いたものであった。これに対し、*The Mill on the Floss* は、幼ない日のGeorge Eliot 自身の姿が描き出されたものである。F. R. Leavis は、この物語の女主人公 Maggie Tulliver が、若き日の Mary Ann Evans の分身であるとみなして、次のように述べている。

> マギーは知的な可能性を内にいだいている女性である。しかしながら、彼女が生まれた環境からは、そうした知的な力を伸ばしていくような刺戟はあまり得られない。彼女は、愛情や、親密な人間的触れ合いを求めようとする、むこうみずなまでの欲求を胸にいだいている。とりわけ、彼女は、宗教的熱誠ともいうべき情緒的な高揚を得たいと望んでいる。そうしてかかる欲求は、その日常のありきたりな生活の様相を変貌させ、彼女をして、ある種の理想的目的に向って、ひたすら邁進させることになるのである。①

*The Mill on the Floss* の前半に叙述されている幼年時代の Maggie の生活——それは、感受性のにぶい大人たちに取り囲まれた 'an ugly duckling' の生活であり、さらにいいかえるならば、感情の鋭敏な、心の傷つきやすい子供の生活が、内面から眺められたものであるのだが——は、実に熾烈な体験として、作者の胸に回想され、よびさまされている。そして、かかる体験はまた、Jerome Thale の表現を借りるならば、'a kind of emotion recollected in tranquility'「静謐(せいひつ)のうちに回想された一種の感動」② として、読者の心を深くゆり動かすものでもあろう。*The Mill on the Floss* の中に、そのもっとも顕著なる特質の一つを求めるとすれば、それは、作品にもり込まれた上述のごとき追憶された自伝的要素としての熾烈な体験に密接なつながりを持つなにか、ではないかと考えられる。このなにかとは、Leavis によれば、「作者自身の強烈で直接的な存在にわれわれの心をむけさせる一種の緊迫感と、反響と、個人的な心のおののき」③ であり、これを、われわれは、*The Mill on the Floss* における情緒的特質と名づけることも可能であろう。しかしながら、われわれは、危険性がこの「情緒的特質」なるもののなかに含まれていることを見過してはならない。というのは、すべての優れた文学作品のもつ鮮明な印象、浸透性、抵抗しがたい真実性は、他方において、かかる「情緒的特質」によって制約を加えられる性質のものだからである。Leavis は、この情緒的

特質のもたらす難点について、次のように言葉を続けている。

……情緒的特質は、ジョージ・エリオットにあっては、一つの願望と心の渇きとを、つまり、彼女の知性にとって陰険な仲間ともいうべきものを、更にいうならば、知性をおしのけて支配力を握りがちであるなにかを表わすものである。④

彼はここで、*The Mill on the Floss* における「情緒的特質」は、批評家が無視することのできないあまたの制約を、必然的にともなうものである、という意味のことを主張している。そしてさらに、George Eliot の情緒的な面を、その知性的面と対応させ、作品にあらわされた convincing な reality を、作者の情緒的特質の所産というよりはむしろ、作者の知性に帰せしめようとしている、とみることができる。つまり、Leavis は、*The Mill on the Floss* のなかに、非常に real で強烈なイメージをもつ映像として描き出されている人物、Maggie Tulliver に対して、「Maggie の熾烈な映像の叙述は、天才と共にあり、天才のものであるところの知性をわれわれに感じさせる」⑤といって、'art' の面にあらわれた George Eliot の知性的特質を重視しているのである。Leavis のかかる見解は、しかしながら、さまざまの見地から反論の余地はあるであろう。（ただし、これは、Leslie Stephen 以来、伝統的で orthodox な George Eliot 論を受け継いできた批評家たちにとって、まさにかれらの意表をつく見解の表明であろうかと考えられる。）だが、いずれにせよ、Leavis のかかる見方に対する反論が、さしあたってのわたしの課題ではない。そうではなくて、むしろ、その是非を問うまえに、かかる見解を出発点として考えられ得る *The Mill on the Floss* における一、二の問題点をとらえてみたいとおもう。

さきに、わたしは、拙稿『George Eliot の田園小説——主として 'life' と 'pattern' の側面からみた場合——』（1965）において、George Eliot の田園小説のうち、処女作 *Scenes of Clerical Life* と、前期の作品の最後のものともいわれる *Silas Marner* について、それらの作品にあらわれた独自の問題点から、これを、小説における 'life' と pattern' の要素と関連させながら考察を試みた。今、わたしは、上記の George Eliot の田園小説についての考察の一環として *The Mill on the Floss* をとりあげてみたいと考えている。というのは、この小説は、ある意味で、George Eliot の前期の作品において一つの頂点に達したものであるといい得るし、また、この作品について充分な考察を試みない限り、George Eliot の田園小説についての研究は片手落ちの感がないでもないと考えるからである。では、論述の都合上、観点をまず作品の主題の面において考察し、さらに、物語の女主人公 Maggie Tulliver が生い立った環境ならびに女主人公自身の性格の発展的過程についてもふれてみたい。

# I

George Eloit は *The Mill on the Floss* で、彼女が目ざしている意図について、「この

書物を書くにあたっての自分の目的は、高い教養をつんだ若い世代が、古い世代と接する時に生ずる一種のあつれきというようなものを示すことにあった」という意味のことを述べている。[6] この意味からすれば、作者の意図は、この小説のテーマについて Leslie Stephen がのべている次の言葉と一致するであろう。

この小説の全体のテーマは、たしかに、「美しい魂」と、平凡でありきたりな環境との対比である。それは崇高で想像力に富む性情の目ざめであると共に、より優れた才能が、宗教的神秘主義や、人間的な愛情の面に活動の分野をみいだそうとする欲求である。[7]

たしかに *The Mill on the Floss* の主題は、成長してゆく個性が、それを執拗に圧迫しようとする環境的圧力の中にあって、さまざまに挫折し、苦しみ、悩みながら、最後まで理知と感受性を失なわないで、敢然として、自らの「運命」と戦っている姿であろうと考えられる。しかしながら、かかる「運命」との対決は、この物語において、女主人公の死、いいかえるならば、あまりにも早急に、しかも突然に、女主人公の身にふりかかる死、によって中断されている。

ところで、この物語の、上述のごときテーマが意味していることの核心にふれるために、われわれはまず、女主人公 Maggie の個人的運命をとりまく環境について、更にまた、Maggie とのつながりにおいて主要な役割をはたしている諸人物について考えてみることにしたい。

一般に認められているように、物語は、前半において、充実した形で展開されている。[8] とりわけ、Maggie と Tom の幼年時代を色どる背景としての St. Oggs の町、そして、そこに住んでいる the Dodsons や the Tullivers の生き方を、作者は重厚な筆緻で念入りに、時にはユーモアをまじえながら描き出そうとしている。たとえば、Floss 河のほとりの、あの旧式な家族（Dodson 家や Tulliver 家のこと）の生活を叙述するさいに、George Eliot は、これを、人類の華々しい歴史の名残りをとどめて、しっとりと調和した美しさを保つ Rhine 河畔の眺めよりはむしろ、「人間の生活とは——その大部分が——かくもせせこましく、醜く、俗悪な存在である」とひとびとに感じさせるような、あの Rhone 河畔の村々の残骸にたとえながら、次のように述べている。

フロス河のほとりの、この旧式な家庭の生活——悲しみですら、悲喜劇の水準に達しないここの生活——を見守るとき、重苦しさに近い感情を、多分、あなたがたは味あわれたことであろう。たしかに、タリヴァー家やドドスン家の生活は、けちな生活である。——崇高な主義も、ロマンティックな幻想も、積極的な自己犠牲の信条も、これに光をそえず、悲惨や犯罪の暗い影をつくるあの抑え難い激情もこれを動かさない。——そこには原始的で粗野な欲望もなく、あのはげしい、忍従的な、むくいられることの少ない労働もなく、農民の生活に詩趣をそえる自然の筆のすさびを、子供のように素直に詠みとることもない。ここでは、ひとは、因襲的で世俗的な考え方や習慣を身につけている。かれらには、教養も洗錬されたところもそなわっていない。たしかに、これは、もっとも索莫たる人間の生活である。……

かれらが抱く見えざる神への信仰は、外面にあらわれている限りでは、むしろ異教のたぐいに見える。かれらが頑迷に固執する道徳的なものの考え方は、先祖からうけつがれてきたしきたりの枠を越えないらしい。人はこのようなひとびとの中で暮せるものではない。美しいもの、偉大なもの、崇高なものを求めようにも、そこへむかう出口もないので、息苦しくなってしまう。……

この息もつまるような狭苦しさは、作者もまた読者と共にわけもっている。しかし、この狭苦しさが、トムとマギーの生活にどのように働きかけたか、つまり、幾世代かにわたって若いひとたちに、それがどのように影響したか、このことを理解しようとおもうならば、われわれもまた、この狭苦しさの意識を感じとっていなければならぬ。それというのも、若いひとびとは、人類進歩の趨勢の中にあって、前の世代のひとたちの精神的水準を越えてはいるものの、まだまだ、心の強いきずなによって、前世代に結びつけられているからである。⑨

以上、引用された箇所では、Maggie の個人的運命を特徴づけている環境について、さらに、かかる環境にあって、Maggie みずからが抱いている「息もつまるような狭苦しさの意識」について、さらにまた、かかる意識が若い世代にどのように影響するものであろうか、などについての一般論的考察がなされている。そしてこの一般論的考察から、作者は次第に Dodson 家と Tulliver 家のひとびとの生き方についての個別的、具体的叙述へと移ってゆく。かくして、女主人公 Maggie の背後に、地方色ゆたかな田園生活のひとこまひとこまが、多様に、しかも綿密につみあげられてゆくのである。上に引用した文中、作者が 'the most prosaic form of life' と呼んでいるもの——かかる生活を、われわれは処女作 *Scenes of Clerical Life* の Shepperton の村のそれにもみいだしたのであるが——は、George Eliot の描き出す田園世界において、物語の背景の一つの主要なタイプを形作っているものと考えられる。つまり、かかるタイプの田園的背景というのは、*The Mill on the Floss* にあっては、Dodson 家や Tulliver 家のひとびとが、充実した姿で住まい、かつ呼吸しているところの世界なのである。それはあたかも、あの *Adam Bede* の Hayslope の村が、Poyser 家のひとたちによって住まわれ、物語全体に素朴で牧歌的雰囲気をかもし出しているのと同様である。そして、これらの世界に生きているひとたちは、いずれも、因襲的で世俗的な考え方をなし、また、彼らの抱く宗教的信仰は、片田舎の信心深いひとたちの偏見に溶けこんで、その正統性を失ってしまった、むしろ「異教のたぐいに見えるもの」なのである。このまことにもって粗野な、人の心をひきつけることの少ない、ほのぐらい雰囲気をもったひとたち、George Eliot の田園小説にあっては、つねに、これらのひとたちがわれわれには身近な存在として描き出され、物語の展開の上に、主要な役割をはたしている。

ところで、Dodson 家の生き方について、作者は、さらに具体的に、次のように述べている。

正直であれば貧しくても、というのはドドスン家のモットーではなく、いわんや貧しいの

に金持ちのような顔をすることなどはもってのほかであった。むしろ、一族の旗印は、正直にして、かつ、富裕に、ということであり、しかも単に富裕であるのみならず、世間でおもわれている以上に富裕であれ、ということであった。……ドドスン的人間にあって、一つの顕著な性質は、そのまじりけのなさ、ということであった。つまり、かれらの悪徳も美徳もともに、つつみかくしのない正々堂々としたエゴイズムの両面を表わすにすぎなかった。それというのも、おのれの利益や信用に傷がつくようなことは、なにごとによらず毛嫌いしたし、厄介な「身内」には、ようしゃなくひどいことを言いもした。だが、困っているこれらの「身内」を見捨てたり、無視したりは決してしなかったからである。要するに、かれらは「身内」には、パンを欠かすようなことはさせなかったかわりに、苦い薬と一緒に、そのパンを食べることを求めたのである⑩

この叙述のなかに、われわれが感じとるものは、全く公平無私な作者の客観的態度と、知的な心の働き方であろうかとおもわれる。また、そのおのおのが Dodson 家のひとたちの一員である Pullet 夫人と Tulliver 夫人が、Garum Firs の前者の邸でかわす会話のやりとりは次のような形で展開されている。

「ベッシー、グレイの奥さんから新しい帽子がとどいたんだよ」

タリヴァー夫人が帽子をかぶりなおしていると、プレット夫人は哀れっぽい調子で言った。

「そうお？姉さん。どんなでしたの？」

タリヴァー夫人は、いかにも興味ありげにたずねた。

「着物を出したり入れたりすると、ごちゃごちゃになってしまうからねえ。でもあんたがあれを見ずに帰ってしまうのも残念だよ。どんなことが起るかわかりゃしない」

プレット夫人は一束(たば)の鍵をポケットから取り出して、それらの鍵を真剣なまなざしでみつめながら言った。

そして、今話したばかりの言葉尻の深刻さにうたれて、夫人はゆっくり頭を横に振った。そのためであろうか、彼女は意を決したように束の中から一つの鍵をえらび出したのである。

「姉さん、わざわざ出してくださるのも面倒なことねえ。でもどんな帽子ができてきたのか見たいものだわ」

プレット夫人はものおもいに沈んだおももちで立ちあがって、磨きあげたたんすの片方の扉の錠をはずした。と、そこに例の新しい帽子があると、読者のみなさんは、はやまってお考えになるかもしれない。が事実は決してそうではない。帽子があのたんすの中に入っているかもしれない、という推察は、ドドスン家のしきたりを、ごくうわべしか御存知ないからこそ起こるのである。プレット夫人は、このたんすの中の、つみ重ねられた下着のあいだにまぎれこんだ、小さなものをさがしていた——つまり戸の鍵をさがしていたのである。

「上等な部屋まで一緒にきてくれなきゃ」プレット夫人は言った。

「姉さん、子供たちも行っていいかしら？」マギーとルーシーが、いかにも見たいというような顔をしたので、タリヴアー夫人がたずねた。

「そうねえ——子供たちを連れていった方が安全かもしれないねえ——ここにおいておけば、またなにかにさわったりするだろうから」

プレット夫人は案じ顔にいう。

そこで、一同は、閉ざされた雨戸の上の半月形の欄間からさし込んでいる光でうすぼんやり明るい、ぴかぴかに磨いた、すべりやすい廊下を行列を作って進んだ。まことにもって、おごそかなものである。[11]

以上の如き場面に接する時、われわれは、あの *Scenes of Clerical Life* の *The Sad Fortunes of the Rev Amos Barton* のなかの Patten 家の炉ばたの集いにみられた、のびやかさ、素朴さを、ここにふたたびみいだした思いにさそわれる。つまり、ここには、しみじみとした懐しい追憶に彩られながらも、作者の鋭い観察力によって、リアリスティックに叙述された、前世紀なかばのイギリス中産階級の生活がある、という感じである。そして、これはまた、喜劇的な題材に対する George Eliot の釣合いのとれた humour の感覚をあらわしている一例でもあると言い得るかもしれない。

この場面に登場する Mrs. Tulliver は Dodson 家の出身でもあるのだが、同時に Tulliver の家に嫁いでいて、Tom と Maggie の母親でもある。彼女はほとんど個性をもたない女性であるけれども、こと Dodson 家の親族に関連したことになると、夫の Tulliver がどんなに抵抗しても、なかなか自分の意志を曲げようとしない毅然たる態度を示す。一方、Tulliver 夫人の姉の Pullet 夫人や Glegg 伯母もこうした Dodson 一家の化身の如き存在である。特に後者の Glegg 伯母は横柄で怒りっぽく、気が短かく、親類のものに対しては、自分に全ぷくの尊敬を払うように強要しながら、Tulliver が自分の気にいらないことをした時、どうしても彼を許そうとしない。彼女は、Maggie が成長してゆくにつれて、その最も手きびしい批判者となる。しかし、それにもかかわらず、Maggie が Stephen と恋に落ちて、どこかで一夜を過ごして帰って来た時、彼女を一人でかばってやるのはこの Glegg 伯母である。これは彼女が最も忠実なる Dodson 家の一員であるということを物語っているのかもしれない。それというのも、Dodson 一家の中心をなす宗教は「血は水より濃い」という信条によってつらぬかれているからなのである。

ドドスン家の人は誰一人として、事のよろしきを得たことや、非常に裕福な教区のひとたちの日常生活や、家庭の伝統の中に示されているそういう永遠の合宜性に属する事柄――たとえば、両親に服従すること、親類のものに忠実であること、勤勉、正直、節倹、木や銅でつくった勝手道具をぴかぴかに磨いておくこと、通用しなくなってしまいそうになるまで、貨幣を退蔵しておくこと、市場へ出すために最高級の商品を生産するということや、なにがなんでも自家製品をこのむといったようなことを、なおざりにすることで非難をうけるようなことはやろうとしてできなかった。[12]

自分たちの生き方は全面的に正しいと信じているこれら Dodson 家のひとびとに対して、これと対照的な存在として描かれているのが、Mr. Tulliver が代表する Tulliver 家のひとたちである。経済的な見方をすれば、Tulliver は、実際よりは見かけのほうがはるかに資産を

たくわえている様子に見える。[13] しかし、彼には経済的な適性や、生活上のことをうまく処理してゆく力はそなわっていない。彼の生き甲斐は水利権をめぐる訴訟問題で相手の Wakem に勝つことである。要するに Mr. Tulliver の血の中には「くよくよしない無分別」「あたたかな情愛」「軽率な短気」が流れ、彼の生涯の悲惨さは、世事に対するその「非実際性」によるものであったと考えられる。この小説の女主人公 Maggie が、父親の Mr. Tulliver の性質をうけついでいることは明らかである。だが、この Maggie の性格については、後で、ややくわしく考えてみることにしたい。これに対して彼女の兄の Tom はどうであろうか。彼は、まずなによりも、子供時代の Maggie の偶像である。Maggie は兄を愛することによって、兄から人一倍愛されたいと願っている。ところが、Tom は父親より、むしろ母方の Dodson の血をうけついで生まれたともいうべき性格の持主である。彼は子供の時から実際的な事柄だけに興味を持ち、自信が強く、他人を批判するにもきびしい。それゆえ、このような性格の Tom に比較してはるかに感受性の鋭い、想像力の豊かな Maggie が、幼年時代から兄のかたくなな仕打ちによって受けた心のいたでは大きかったようである。そしてさらに、Maggie が Tom からうけたもっとも手ひどい罰は、Stephen との恋が実らずして終った駈落ち後の Tom の怒りである。Maggie と Tom は物語のクライマックスの洪水の場面、すなわち、かれらの死の瞬間においてはじめて、兄と妹としての和解を果たす。この意味からすれば、Tom はまさに、「Maggie の世界のかなめであり、その力を彼女の上にふるいつづけた」[14] 存在とみなすこともできるであろう。

## Ⅱ

*The Mill on the Floss* において、作者の意図が、「社会が個人に対してどのように働きかけ、また個人は社会に対してどのように反応するか」を眺めることであり、作者の強調は「個人と社会との相互関係」の上におかれていたことは前述のとおりである。これまでわたしは主として、個人をとりまく社会について、特に、この小説の主人公 Magge の個人的運命にかかわりあいをもつ環境的諸条件について考察してきた。それは、具体的には Maggie をとりまく環境としての St. Ogg's の町、そこに生きている Dodson 家や Tulliver 家のひとびとについての考察であった。今、わたしは問題の焦点を、物語の中心人物である Maggie Tulliver にしぼって、彼女の性格描写について、さらに、彼女がその生い立った社会的環境の中で、いかにして 'the clue of life' 「人生の手引きの糸」[15] をみいだそうと探索したかについて考えてみたい。実際、ある意味において、*The Mill on the Floss* の構成を決定しているのは、この 'the clue of life' への探求であるとも考えられるからである。[16]

ところで、Maggie Tulliver の運命について、まず第一に考えられることは、彼女がその生涯を通して、「みずからの心情や理智の欲求を満たすすべのない世界に生きている女性であ

る」[17] ということである。彼女が人生に直面し、さまざまな frustrations にぶつかってゆく姿は、われわれに、 *Middlemarch* の女主人公 Dorothea Brooke や *Daniel Deronda* の Gwendolen Harleth の姿をおもいおこさせる。前者は、広く世の中に役立つような一生（作者はこれを 'an epic life' と表現している）を送りたいという夢を胸に抱きつづけているのだが、meanness of opportunity 「機会の貧困さ」のゆえに妨げられ、次第にそのはけ口を失ってゆく過程が描かれたものであり、後者は、「若さ、そしてその真剣さ、虚栄とおろかしさ、若さそのものの絶対性をあますところなく表現している」[18] ともいうべき女性が、結婚についての誤った選択のゆえに、罰せられ、徐々に一つの狭い環境的圧力のなかに閉ざされてゆく姿をとらえたものである。しかしながら、われわれの Maggie は、 Dorothea でもなければ Gwendolen でもない。彼女は、まずなによりも、求めても求めても満たされることのない「魂の渇き」を感じながら生きている女性である。作者は、幼年時代の Maggie について次のように述べている。

> マギーの黒い眼を見ると、獣に姿をかえられた王女たちの物語を思い出すのはどういうわけだろ。……彼女の眼には、みたされない知恵が、そして、求めてもみたされない愛が溢れているからであろう……[19]

これは Philip Wakem の意識をとおして表現された言葉であるが、Maggie の性格を端的に、しかも象徴的にあらわしているように考えられる。そして、幼ない日の Maggie はまた空想的で夢みがちな女の子でもあった。彼女は屋根裏部屋で、人形の頭をこづきまわしたり、あるいは、ジプシーの群に加わろうと、家を逃げ出したりして、自らの frustrations を解消しようとする。つまり、そうすることが、「汚辱をのがれて、周囲とぴったり調和した生活をする唯一のみち」[20] と感じているのである。

Maggie の生涯において、最初の危機は、父親の経済的破綻と病気という形で、彼女の身にふりかかる。そして、それ以後の生活は、彼女には一層たえ難く、現実は一層暗く、狭苦しく感じられるようになる。この時の Maggie の体験を作者は次のように叙述している。

> 父親の横たわる寝台から眼をそらして、彼女の世界の中心であるこの悲しい部屋の陰気な壁を見つめている、茶色の上衣を着たマギー、眼をあかく泣きはらして、厚い髪をうしろにかきあげているマギー、彼女はあらゆる美しくよろこばしきものへのはげしい憧れに燃える生きものである。あらゆる知識に飢え渇き、消え去ってわが身の近くには訪れそうもない夢のような音楽を追うて耳をそばだて、この神秘な人生のすばらしい印象をことごとくつなぎ合わせて、そこに彼女の魂を安住させるなにものかにむかって、無意識に盲目的な憧憬をよせる。外と内とがかく対立するとき、そこから痛ましいあつれきが生じたとてふしぎはない。[21]

以上の一節は、小説の前半（Book Ⅲの Chapter Ⅴ）から引用されたのであるが、ここで

は、Maggie の抱く「憧れ」が、さらにいうならば「憧れ」の宗教的ないしは理想主義的面が、漠然とした形で提出されている。しかもこの場合、Maggie は、みずから無意識的且つ盲目的に抱いている憧憬がいかなる性質のものであり、また、それがいかなる対象にむかっているものであるか、具体的に知らされていない。つまり、この一節における Maggie 自身は、自己認識においてやや不足しているように考えられる。そして、そこには、あの Dodson 家のひとびとの描写にみられた作者の客観的態度や温い同情につつまれた humour の感覚は完全に失なわれてしまっている。そこにあるものはただ、情緒的なものに流された主観的自己憧憬的態度のみである。Leavis が Maggie Tulliver の描写について、「作者の成熟した知性や判断力が排除されてしまっている」として非難の対象にしているのは、この部分についてであろう。しかしながら、かかる批判はあくまでMaggie の性格描写の一面——とりわけ、情緒的もしくは精神的に抑圧された境地や、心の高揚された境地における Maggie の characterization——に対して向けられたものであって全人格としての Maggie に対して、さらにいうならば、Maggie のすべての行動と、行動を通してあらわれ出る人間性の全面に対してなされたものではないと言い得るであろう。

さて、Maggie が 'the clue of life' の探求への一つの手がかりを見いだす直接の動機となっているのは、Bob Jakin によって彼女に贈られる一冊の書物、Thomas à Kempis の *The Imitation of Christ* である。そしてこの書物をはじめてひもどいた時の Maggie の感慨は、作者によって次のように述べられている。

> マギーはほっと吐息をつき、突如としてあらわれた幻をもっとはっきり見ようとするかのように、房々とした髪をかきあげた。そうだ、ここに人生の秘義があったのだ。それさえあれば、ほかの秘義はすべて放棄してもよい。——ここにこそ、ほかの助けをかりなくても到達できる高みが、見識と、力と、努力とによる獲得があるのだ。そして、それらのものはすべて、自分の魂の内においてのみ、——すなわち、いと高きところにましますわが師が、その御声に耳を傾けよと待っておられるみずからの魂の内においてのみ——かち得られるものなのである。その時、突然問題が会得され、解決されたように、彼女のうちに閃くものがあった。今まで若い自分が苦しんできたすべての悩みは、自分だけの快楽が、この世界の欠くべからざる中心をなしてでもいるかのように、それに執着していたことからきていたのだ……。[22]

かくして Maggie の自己放棄の生活が始まる。この自己放棄の境地は、ある意味において、Maggie 自身の egoism と、誇張された感情の高揚のあらわれではないかと考えられる。George Eliot が、この自己放棄の境地における Maggie を、徒らに情緒的に流されることなく、かなり客観的に、分析的にとらえようとしているということを、われわれはこの部分においては認めることができる。なぜならば、Maggie は、みずからの egoism を意識的にふりすてようと懸命に努めてはいる。しかし、そうした意識的な egoism の放棄の中に、彼女

は、「とり集めて身に飾るべき栄誉の棕櫚の葉かげもない嶮しい本道、寛容と正しい斟酌と自責の道よりはむしろ、棕櫚の枝の生い茂る殉教と忍苦の道」[23]を求めているからである。すなわち、われわれは、こうした Maggie の態度に、かえって逆に、彼女の egoism の一面があらわれているとみることができる。それというのも、Maggie は、この自己放棄の中にこそ、「久しいあいだ、むなしくも憧れていたあの満足への道」を見出そうとしているからであろう。

Maggie みずからが、「狭苦しさの意識」に悩み苦しんでいるあの 'prosaic' な田園的環境の中にあって、彼女の知的な欲求と渇望に対して、純粋に、しかも、高度な知的水準の段階において反応を示してくれる唯一の人物は、Philip Wakem である。彼は、 Maggie が自己放棄的、隠遁者的生活を送ろうとしているのを見て、これに批判的態度を示そうとする。すなわち、 Philip は、彼が与えようとした書物さえ、その禁欲的態度のゆえに受けとろうとしない Maggie に対して、次のように語りかけている。

「でも、君だって何時までも、今の環境に閉じこめられているとは限らないでしょう。何故そんなにして、自分の魂を枯らしてしまわなくてはならないの？そんなのは狭苦しい禁欲主義というものです。マギー、僕は、君がそういう生き方を続けるのは見たくないのです。詩や、美術や、知識は、神聖で純粋なものなんですよ」[24]

さらにまた、彼は Maggie に対し、次のように警告している。

「不自然なことをする力は誰にも与えられていません。否定に安全を求めるのは単なる卑怯というものです。そんなことでは、どんな性格だって強くはなりません。君もいつかは世の中へ投げ出される日があります。その時、君が今抑えている本性が、どれもこれも合理的な満足を求めて、猛烈な食欲のように、君に襲いかかるでしょう」[25]

とりわけ、この最後の 'You will be thrown into the world some day, and then every rational satisfaction of your nature that you deny now, will assault you like a savage appetite.' という言葉は、それ以後の Maggie の運命を予言してでもいるかのような響きを持っている。なぜならば、やがて Maggie は、いとこの Lucy と婚約者同様の間柄にある Stephen Guestに恋をするようになるからである。つまり、彼女は、「諦らめに満足して過した数年の後に、欲望と憧れの心にもどってしまった」からである。

Stephen の歌声を耳にし、あの声の余韻をふくむようなまなざしで、じっとみつめられていた昼間の出来事を、夜になってから思い出しながら、何かしら興奮の渦の中にひきいれられているような状態の Maggie, かかる Maggie を、George Eliot は次のように説明する。

あわれにも、マギーのはりつめた、求めてやまない性質にあっては——あの耳ざわりな雑音や、せせこましい日課に明け暮れするお粗末な学校を離れてきたばかりのマギーにあっては——このように見かけは取るに足りない些細な事柄（昼間きいた Stephen の歌と、あの

余韻を含んだまなざしの効果とをさす）が、神秘的ともいえるように、彼女の想像力をよびさまし、それをかきたてるだけの効果をもたらした。彼女が、はっきりスティーヴン・ゲスト氏のことを考えていたわけではなく、また、かの人が、崇敬のまなざしで自分を見凝めていたことを考えていたわけでもない。むしろ、彼女は、かって読んだり、夢想のうちに織りこんだりしていた詩のかずかずのなかの、おぼろにいりまじった映像のあやなす、愛と美と悦楽の世界がやや手近に実在しているように感じたのであった。[26]

彼女が Stephen を恋することは、いとこの Lucy から恋人を奪うことであり、また、かつてお互いに好意を示しあった Philip をも裏切ることになると思って、Maggie はおもい悩む。実際、Maggie は痛々しいまで良心の苦しみを味わい、遂には、これらの苦しみに堪えかねるという程の立場に追いつめられてゆく。ここで、 George Eliot が Stephen Guest なる人物をとおして、Maggie を、「誘惑」という人生におけるディレンマや道徳的選択の問題に直面させようとしている意図は明らかである。

ところで、自信ありげな人――といっても誰でもというわけではないが、ある特別な人が突然控え目で、相手に気を配るようなつつましやかな態度にかわって、ていねいに自分のために足台を置いてくれたり、その人が、そのまま腰をかがめて、窓と暖炉の間のその席ではすきま風があたりはしないかとか、さしつかえなかったら、テーブルを移してあげよう、といってくれる。こういう心づかいを受けてみると、女性は娘時代から、ごく些細な言葉のはしにも、日頃の訓戒を読みとるようしむけられてはいるけれども、彼女の目には、裏切りめいたやさしさが、ほんのかすかに、しかも、すばやく、浮ぶものなのである。[27]

すなわち、 Stephen Guest の彼女に対する熱烈な愛情に満ちた目なざしや態度に接するとき、Maggie は、思わず夢みるような魅惑状態にひきこまれる。この場合、Maggie の道徳的感受性ともいうべき 'higher nature' は一時その活力が失なわれてしまう。彼女の感受性がこのような状態にあるときには、過去や、過去につながりのある記憶や、みずから心にいだきつづけてきた道徳的ヴィジョンは、未来に対する気まぐれで放逸な空想に、さらにいうならば、現在という瞬間を快よく、しかも美しく、無我夢中に過しているという恍惚の境地にとって代わられるのである。たとえば、Maggie が Stephen と共にボートで河を下る場面(Book Ⅵ, Chapter xiii, p. 311) における両者の心の状態は、Stump 女史も指摘しているように、この小説のなかにあらわされているとされている、 drifting imagery によって説明できるかもしれない。[28] つまり、そこでは、「流されている」「漂よっている」というような passive で will-less な心の状態をあらわす表現が見られるのである。Stephen と Maggie が、潮の流れのいきおいにつれて、なめらかに滑るように河を下ってゆくとき、最初のうちは、passive な心のやすらぎが、彼らの意識を包んでいる。そして彼らを包むこの 'enchanted haze' 「妖しい霞」は、それ以後において、Maggie の心によびさまされようとしているはげしい苦悶と、はっきりした対照をなしている、とみることができる。われわれは、この「静けさ」がたゆと

うような場面に、 Stephen と Maggie の二人の間柄における束の間の美しさを感じとることもできるのである。

しかしながら、Maggie がこの 'enchanted haze' に包まれたような恍惚状態からめざめた時、そこには、ふたたび、彼女が以前から抱きつづけてきた道徳的なヴィジョン——いいかえるならば、あの Thomos à Kempis の書物によって教えられた自己放棄への信条、すなわちみずからの幸福を追求しようとする欲望に対する否定的態度——が彼女の意識のなかによびもどされる。この時、彼女は、「従うべき義務を意義あるものとした因縁をたち切って、情熱のおもむくままにひきずられるよりほかには、頼るもののない魂の追放者に、われとわが身を堕してしまった」[29]ことを身に泌みて痛感する。そして、愛する Lucy と Philip の信頼と希望とを踏みにじることによって、「自分がかつて久しい以前、幼ない心ながらもひたすら求めてしっかり握りしめていたはずのあの『人生の手引の糸』を放してしまっていた」[30]ことを悲しむのである。Mudport 行きのオランダ船の中で Maggie は Stephen に次のように語る。

「わたしたちは、自分たちのためにも、また、ほかのひとたちのためにも、幸福を選ぶことはできません。幸福などというものはどこにあるかわからないのです。わたしたちにできることは、ただ、今という瞬間にこのまま身をまかせるか、それとも、現在のこの状態をあきらめるか、そのどちらかを選ぶことなのです。そしてそれは、わたしたちの心のうちなる神の声に従うためなのです。つまり、人生を浄めるすべての動機に忠実であるためなのです。この信念をつらぬき通すことは、たしかに難しいことでしょうとおもいます。わたしは、いままで、いく度もいく度も、この信念を自分から遠ざけてしまいました。けれども、もしわたしが、この信念から永久に遠ざかってしまったならば、わたしの人生の行手の闇を照らしだしてくれる一筋の光もなくなってしまうでしょう。」[31]

これらの Maggie によって語られる言葉のうち、'for the sake of obeying the devine voice within us—for the sake of being true to all the motives that sanctify our lives' という句は、彼女が、今にいたって認識をあらたにしているところの「人生の手引きの糸」への探索の道標ともいうべきものであろうと考えられる。Maggie は Stephen と別れてボートを降りる時、彼にむかって、'oh, some good will come by clinging to the right' 「ああ、正しいことに縋っていれば、何かいいことがありますわ」[32]と、絶叫せんばかりの調子で語る。この「正しいこと」というのは、Maggie にとって、過去の心のきづな——ここでは Lucy と Philip の彼女に対する愛情と信頼というきづななのでもあるのだが——に縋ることであり、みずからが果すべき義務と確信に対して、忠実であろうとすること、なのである。

Stephen と別れて、St. Ogg's の町に帰ってからの Maggie の生活は、彼女にとって、前よりも一層苦しく堪え難い試錬となった。彼女が、もっとも恐れていた兄の Tom（しかしながら、Maggie は結局のところ最後までこの兄を愛し続けないわけにはいかなかったのである）は、彼女を同じ一つ屋根の下にかくまうことも、また彼女の声を耳にすることすらも拒絶し

た。彼女の味方になってくれたものは、母親と、Dodson 家の伯母の一人 Glegg 夫人と Bob Jakin と Dr. Kenn のみである。もともと因襲的で低俗、排他的な St. Ogg's の町のひとびとの気風が、Maggie の過失をそのまま過失として寛大に見過してやらないのは当然であろう。それゆえ、彼女は、時には、自らの境遇に絶望して、Dr. Kenn に、心のうちを次のように打ち明けている。

「わたしには、支えというものがまるっきりないのです。自分は、過去から切り離された孤独なさすらい人であるような気がします」[33]

Maggie に対する最後の誘惑は、Stephen からよせられた一通の手紙という形で彼女を訪れる。この手紙の中には、「もういちど自分たちは一緒になって新しい生活を始めるべきではないのか」という意味のことがしたためられている。たしかに、これは、Maggie にとって非常に苦しい、悲しみに満ちた試錬のひとときであった。この困難に打ち克とうとする Maggie について作者は述べている。

夜のふけるまで、彼女はじっと坐っていた。身じろぎ一つせず、進んで祈ろうとする力もなく、ただ夜明けの光を待つばかりであった。遠い過去のことが、熱情ですらかき消すことのない思い出と共に、彼女の心によみがえってきた。それとともに、彼女の心にわき起こったのは、自己否定的境地から生まれる憐びんと情愛の泉であり、熱誠と決断の泉であった。ずっと以前、暗誦したことのある、あのなつかしい書物に手でそっとしるしをつけておいた言葉が、ふと唇をついて出て、それが低いつぶやきとなってあふれ出た。だが、それは、窓を打つ激しい雨と、うめき、たけりくるう風の音にかき消される程のつぶやきであった。「われ十字架をうけぬ。御身の手より受けぬ。われ十字架を負うべし、死するまで負うべし。御身、われに負わせたまいければなり」[34]

ここで、Maggie は今一度、「人生の手びきの糸」をしっかりとつかむことによって、自己と束の間の生とを和睦させようとしている。この時、思わず彼女の口をついて出てくるのは、ふたたびあの Thomas à Kempis の *The Imitation of Christ* の一節である。

## Ⅲ

この小説の結末について述べるならば、すでに多くの批評家が指摘しているように、これは長い naturalistic な小説全体からみて、「不誠実な、メロドラマ的結末である」[35] というそしりをまぬがれ得ないであろう。Floss 河の氾濫による Tom と Maggie 兄妹の溺死、とりわけ Maggie の死は、Stump 女史ものべているように、その「死」をとおしての「生」であり、彼女にとって唯一の救いは、その「死」であったといえるかもしれない。この考え方からするならば、Floss 河の「河」は life-giving であると同時にまた、life-taking でもある。[36] しかし、このように「河」そのものに symbolical な意味をもたせて解釈するのはどう

であろうか。この作品全体の雰囲気――それは、細部がすべて日常的で微細な印象で埋められている、重厚で多様性にとんだ、リアリスティクなものであるのだが――から考えてみるならば、「河」に詩的且つ象徴的効果を求めるのは、かえって、この小説のもっている merit を無視した、こじつけ的解釈にすぎないように思われる。つまり、Floss 河そのものには、何等 symbolic で metaphorical な価値は含まれていないのである。ただ、言い得ることは、この小説の結末が、いかにもヴィクトリア朝の小説の読者達に喜んで受け容れられそうな 'dramatic ending' であるということ、また、かかる結末が、舞台における壮麗で悲劇的な幕の役割を果たすことによって、一般の読者には、ある種の情緒的満足感を味あわせてくれる、ということである。

この小論の序において、わたしは、*The Mill on the Floss* における「情緒的特質」のもたらす制約、すなわち、すべての優れた文学作品に当然含まれていると考えられる鮮明な印象、浸透性、抵抗し難い真実性等に加えられるべき制約について、 F. R. Leavis の見解をまじえながら考察を試みた。われわれがこの小説のなかに、上述のごとき「情緒的特質」のもたらす制約をみいだすとすれば、それは、主として、女主人公 Maggie Tulliver の性格描写の一部において、いいかえるならば、情緒的ないしは精神的に抑圧されたり、あるいは高揚されたりしている心的状態における Maggie の描き方においてであった。たとえば、Book Ⅲ の Chapter Ⅴにおける Maggie の「憧れ」を叙述した箇所にあきらかなように、この場面における Maggir の描き方は、 George Eliot の 'art' の未熟さをあらわすものであり、「物事を本質的に識別する能力が充分に達成されていない段階――識別の可能な条件の一つである、均衡のとれた 'impersonality' が未だ達成されていない段階――に属している」[67] ともいうべきものである。

しかし、*The Mill on the Floss* の女主人公がリアリティに乏しい、 daydream 的映像にすぎないというのではない。それどころか、彼女は依然として強烈なイメージをわれわれの心にやきつける「生き生きしさの象徴」ともいうべき存在である。とりわけ、この小説の前半（Book Ⅰから Book Ⅴまで）における、幼い日の Maggie の熱誠溢れるばかりの姿、彼女をとりまく社会的環境およびそこに生きる諸人物についての叙述は、われわれに 'sense of life' や 'vividness' もしくは 'vitality' を感じさせる。したがって、われわれが、もし、この小説を、単なる 'art' としてではなく、鮮明に描き出された 'life' として、さらにいいかえるならば、人生をあるがままに叙述した 'presentation' としてうけとるならば、そこからより多くのものを汲みとることができるであろう。なぜならば、この作品のなかでは、かくも多くのものが、vivid で忘れ難い存在であるからである。

しかしながら、生き生きしさ、充実性、真実性のみが、すぐれた小説をはかる価値基準にはならない。そこには 'presentation' 以上のものが、つまり、表現されているところのものの価値を定め、かつ、それに 'significance' をあたえるべきある種の 'pattern' もしくは 'struc-

ture' が要求される。*The Mill on the Floss* には、かかる意味における 'pattern' や 'structure' が明白な形で存在しているとは言い難いであろう。この作品の前面に絶えず浮かびあがってくる作者の道徳的ヴィジョンは、Maggie の 'the clue of life' への探求——その探求の行きつくところは、彼女の自己放棄の境地であったのであるが——をとおして語られている。そして、この場合、作者の強調は女主人公の行動に、ではなくして、彼女が、世の中に対していかなる反応を示し、また、世の中は彼女に対していかなる影響を及ぼしたかということに、つまり、「個人と社会との相互関係」の上におかれている。それゆえ、*The Mill on the Floss* の構成の大半は、成長してゆく Maggie の内面生活の記録と共に、彼女をとりまく社会的環境についての綿密な分析的考察と叙述とに捧げられていることはあきらかであろう。しかしながら、ここで作者が強調せんとしている意図は、小説の後半（Book Ⅵ と Ⅶ）において、充分に意図以上のものとして生かされていないという印象をわれわれはうけとる。これは、一つには、この部分の物語が、その進行のテンポがあまりにも急速に運ばれていて、前半にゆたかにみられた作者のゆったりした写実的な態度は影をひそめてしまっているからであろうし、また、一つには、Maggie の恋人役を演ずる Stephen Guest が、批評家たちの指摘しているように[38] われわれの Maggie にはふさわしからぬ相手だからでもあろう。まさに、Stephen は、この小説の中に登場する唯一の輪郭のはっきりしない daydream 的映像である。したがって、この小説を 'form' の面からみた場合、前半と後半の不釣合いが目立ち、ここに一つのまとまりある全体が形作られているとは言い難い。むしろ *The Mill on the Floss* は、その個々の性格、もしくは、個々の場面の叙述において優れているけれども、それが全体として眺められた場合、構成のもたらす効果の点で、比較的不成効に終っているとみなすべき作品であろう。かかる意味からすれば、この小説は、その長所の面からでも、あるいは短所の面からでも、最も George Eliot 的特質をそなえた作品であると言い得るであろう。

---

**註**

① F.R. Leavis, *The Great Tradition*(1948), P.39

② Jerome Thale, *The Novels of George Eliot*(1959), P.37

③ F.R. Leavis, *The Gveat Tradition*, P.39

④ *Ibid.*, P.39

⑤ *Ibid.*, P.39

⑥ Lawrence & Elisabeth Hanson, *Marian Evans & George Eliot*(1952), P.220

⑦ Leslie Stephen, *George Eliot*(quoted in F.R. Leavis, *The Great Tradition*, P.41)

⑧ この小説を構成の面からみるならば前半と後半の二つの部分に分けることができる。前半は Book Ⅰ から Book Ⅴ までであり、後半は Book Ⅵ と Ⅶ のみである。このように、前半にかなりなスペイスを費やしているのは、George Eliot 自身が「題材を好ましいと思うあまり、知らず知らずのうちにひきこま

れた 'Epische Breite'」と述べているように、この部分で、作者はかなりゆったりした態度で、しかも着実に、物語の中心的ドラマを決定する社会的環境を描き出そうとしているからである。

⑨ *The Mill on the Floss* (William Blackwood and Sons, Edinburgh and London) vol. Ⅱ, pp. 5～6. この日本語訳については、工藤好美・淀川郁子両氏共訳の「フロス河の水車場」筑摩書房 (1965) を参考にさせていただいた。

⑩ *Ibid.*, pp. 8～9

⑪ *Ibid.* vol. Ⅰ, pp.133～135

⑫ *Ibid.* vol. Ⅱ, pp. 7～8

⑬ Edward Tulliver には、貧しい農夫 Moss のもとへ嫁いだ妹の Gritty があるが、この妹が困窮しているときは、自分自身借金しながらも金を貸してこれを助けてやる。まさに Dodson 的な生き方と正反対のやり方である。

⑭ 英文学ハンドブック――「作家と作品」シリーズ、*George Eliot* by Lettice Cooper, 土井治訳、研究社(1963), P.26

⑮ *The Mill on the Floss*, vol. Ⅱ, P.323

⑯ Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels* (1959), P.67

⑰ Bernard J. Paris, *Experiments in Life George Eliot's Quest For Values* (1965), P.156

⑱ *Daniel Deronda*: *A Conversation* by Henry James (Printed as *Appendix* in F.R. Leavis: *The Great Tradition*) P.263

⑲ *The Mill on the Floss*, vol. Ⅰ, P.278

⑳ *Ibid.*, P.160

㉑ *Ibid.*, P.369

㉒ *Ibid.*, vol. Ⅱ, PP.34～35

㉓ *Ibid.*, P.39

㉔ *Ibid.*, P.60

㉕ *Ibid.*, PP.96～97

㉖ *Ibid.*, P.183

㉗ *Ibid.*, PP.237～238

㉘ Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels*, P.110

㉙ *The Mill on the Floss*, vol. Ⅱ, P.322

㉚ *Ibid.*, P.323

㉛ *Ibid.*, P.332

㉜ *Ibid.*, P.334

㉝ *Ibid.*, P.360

㉞ *Ibid.*, PP.390～391

㉟ Joan Bennett, *George Eliot Her Mind and Her Art*(1948), P.130

㊱ Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels*, P.127

㊲ F.R. Leavis, *The Great Tradition*,P.42

㊳ Leslie Stephen, *George Eliot*, P.104 (quoted in F.R. Leavis *The Great Tradition*, P.40)